

## 方言指数の推移

—昭和38年と昭和54年の「方言しらべ」の比較—

篠原 優

(1980年10月14日 受理)

### The Changes of Dialect Quotient

Yutaka SHINOHARA

#### I 対 象

##### 一 鹿児島方言の壁

わが国は、国内のどこでも、同じ国語が通用する。しかし、全国的に多くの方言がある。それらのうち、とくにわかりにくいものは、鹿児島方言と東北方言であると語られる。他県人や他の地方にすむ人たちにとって、ところどころの単語がわかるだけになりやすいからである。

鹿児島方言は離島をのぞく鹿児島県本土ならび宮崎県南部でもちいられている音声言語である。その特異性のゆえに、鹿児島方言圏に生まれ育ったもの (native) や、他の地方から転住して生活するもの (non native) にとって、鹿児島方言は多くの問題をなげかけて来た。音声言語の学習における臨界年齢は、およそ12才とされている。そこで、その頃をすぎて、鹿児島方言圏に移住したものは、生えぬきの人たちのように「かごしまべん」を話すことは、きわめてむずかしい。たとえ断片的にもちいたとしても、アクセント (accent) やイントネーション (intonation) のために、はえぬきの人たちから、「ことばがおかしい」といわれることになる。

鹿児島本土へ転住して、30年ちかくすぎても、「かごしまべん」を聴取することもむずかしい。「理解することばは、使用することばより多い」という言語発達の実則は、鹿児島方言にもあてはまる。しかし、長期にわたる他県からの転住者でも、古老の話す「かごしまべん」は、30%ぐらいしかわからない。鹿児島方言は、話すだけでなく、聞くこともむずかしいということになる。

教育的・文化的・社会的な立場から、方言の壁をまとめると、次のようになる。

- 1 保育所・幼稚園・小学校・中学校などで、共通語指導に大きな比重をあたえて来た。話しことばの時間を特設したり、「ことばのリボン」を用いたりした。
- 2 校区や地域ぐるみの共通語運動が、新聞で報道されていた。
- 3 学力の評価や調査で、方言の壁がとりあげられて来た。二重言語 (bilingual) の読解や聴取にあたえる影響の指摘である。
- 4 共通語では自分の考えや感じを、じゅうぶんに表現できにくいとする人たちが、普遍的に存

在する。「さつまのいもづる」は、このことから発生する。

5 共通語を話す能力が、人格評価の要因として、異常な比重をしめやすい。共通語をつかえないのに婦人会長にえられたため、自殺した事例もあった。

6 他県人をまじえた集会では、本県からの出会者は、ことばの劣等感をもちやすいと語られる。○全国的な規模の集会で、しばしば経験させられた事実である。

7 他の地方で、鹿児島方言で話しあっていると、韓国語や中国語とまちがえられる。関東大震災での事例が語りつがれて来た。

8 県外へ就職した若者たちが、共通語をもちいての電話や客との交渉で、しばしば困難に直面した。中学校卒業生たちの職場での落伍は、このことから発生した。

9 県外へ転住した成人も、方言コンプレックス (dialect complex) をもちやすい。明朗性や社交性がたりなかったり、県人仲間の閉鎖集団になりやすいという。

10 本県人には方言的人格がつくられやすいという。排他性・徒党性・激情性・事大性などが、その例としてあげられて来た。

これらの壁について、たしかな研究がのぞまれる。常識や直観にはしばしば独断や偏見がふくまれていたり、皮相的であったりするからである。

## 二 鹿児島方言への予測

いわゆる「かごしまべん」は、他県人から好奇の眼でみられたり、あるばあいには、情報伝達の障壁になったり、さらにまた、人格形成における方言コンプレックスの問題も、とりあげられて来た。全国各地の方言のうち、鹿児島方言は東北方言とともに、いちじるしい特異性をもつからである。

ところで、幼児教育の普及、交通機関の進歩、マスコミュニケーション (mass communication) の発達、学校教育や社会教育の発展などによって、全国の方言はしだいに解消の一途をたどるものと予測される。とくにテレビの急激な普及と視聴によって、その解消は、よりはやくなるともいわれている。

しかし、鹿児島方言の推移についての予測では、次の諸点が問題になる。

1 音声言語の学習における臨界年齢は、およそ12才である。このことからいえば、親から子へ「かごしまべん」が語りつがれることになる。学校で「話しことば」の時間を設けても、鹿児島なまりのない教師は、およそ10%である。(註1)

2 関西方言と共通語の関係が、鹿児島方言と共通語にも存在する。本県の都市居住者や知識人は、鹿児島方言の壁をみとめながらも、方言に愛着をもち、ほこりをいだいている。石川啄木は「ふるさとの訛なつかし、停車場の人ごみの中に、それを聴きにゆく」とうたっている。

3 幼児期や小学校の共通語指導によって、かなり共通語を使用している、中学校へ入学するとくずれてしまうと語られる。昭和38年におこなった調査結果でも、そのことがしめされている。

(註2, 3)

4 鹿児島県民は進歩的であり、また保守的である。(註4)「鹿児島は封建制にのこされた最後のとりでである」ともいわれて来た。保守的な県民性は、保守的な言語生活にも、つながりやすいと思われる。

これらのことからいえば、鹿児島方言は解消の道をたどりながらも、全国各地の方言にくらべて、より長期にわたって残存するという予測も成立する。

なお、人類の言語は流動的であり、方言は共通語の要素である。共通語は人為的であり、東京方言ともいえる。「きれいなことば」;「きたないことば」という評価は、原則としていえば、いかなる方言にもあてはまらない。ただ、方言が言語の機能を果しにくいばあいがあったり、ことばの劣等感が生活の壁になりやすいことが問題になるだけである。

### 三 研究目的の設定

児童生徒における鹿児島方言の推移をあきらかにするために、昭和38年6月におこなった「方言しらべ」と実施条件を斉一にして、昭和54年9月に「方言しらべ」をおこない、両者の結果を比較した。16年を経過しているが、その間における教育的・文化的ならびに社会的諸条件の変化による影響を、項目別、地域別、学年別、ならびに性別にとらえることにする。

なお、方言使用の実態は、昭和38年のばあいとおなじように、方言指数 (dialect quotient) の方法でもくらべることにした。

## II 方 法

### 一 実施の要領

昭和38年6月に、Table 1-1 にしめすような「方言しらべ」をおこなった。それによって、方言使用の実態をあきらかにし、さらに方言が読解・発表および聴取におよぼす影響をたしかめた。

地域別、学年別、性別にくらべたばあい、方言指数の実態は、Figure 1-1 のとおりである。実態をまとめると、学年がすすむにつれて方言指数がたかくなる、都市よりも農村でよく方言がつかわれている、男子は女子よりも方言指数がたかいなどであった。

今回は昭和54年9月に、前回とおなじ「方言しらべ」をもちい、さらに、地域・学校校・学年も斉一にして、両者の結果を比較することにした。実施者も前回とおなじく篠原である。

### 二 実施の対象

昭和38年のばあいとおなじように、今回も小学校3年および6年の児童、中学校2年の生徒とした。

都市の学校として、鹿児島市草牟田小学校と清水中学校、農村の学校として、始良郡三船小学校・山田中学校と揖宿郡大成小学校・山川中学校をえらんだ。いずれも、昭和38年とおなじである。

ただし、揖宿郡の中学校は、前回は大成中学校であったが、其の後、山川中学校に統合されていた。  
対象数は Table 2-1 のとおりである。

Table 1-1 方言しらべ

学校	男・女	年組	家の職業	名前
これは心理学の研究のためのものです。みなさんの成績には関係がありません。できるだけ正直に自分にあてはまる答えに○をつけてください。				
1	あなたは、学校で、べんきょうの時間には、方言（かごしまのことば）を、つかっていますか。			はい いいえ ときどき 共通語（きれいなことば） とまぜて
2	あなたは、学校で、休みの時間には、方言をつかっていますか。			はい いいえ ときどき 共通語とまぜて
3	あなたは、先生とお話をする時、方言をつかいますか。			はい いいえ ときどき 共通語とまぜて
4	あなたは、知らない人とお話をする時、方言で話しますか。			はい いいえ ときどき 共通語とまぜて
5	あなたは、学校の外で、友だちとお話をする時、方言をつかいますか。			はい いいえ ときどき 共通語とまぜて
6	あなたの家では、方言をつかっていますか。			はい いいえ ときどき 共通語とまぜて
7	あなたのお父さんは、家族の人たちとお話をする時、方言をつかいますか。			はい いいえ ときどき 共通語とまぜて
8	あなたのお母さんは、家族の人たちとお話をする時、方言をつかいますか。			はい いいえ ときどき 共通語とまぜて
9	あなたは、家で、お父さん・お母さん・兄さん・姉さんとお話をする時、方言をつかいますか。（四人そろってなくてもかきなさい）			はい いいえ ときどき 共通語とまぜて
10	あなたは、家で、弟・姉とこ話をする時、方言をつかいますか。（弟も妹もいない人は、かかなくてもよい）			はい いいえ ときどき 共通語とまぜて
11	あなたは、共通語で話すのと、方言で話すのとは、どちらが話しやすいですか。			方言が話しやすい 共通語が話しやすい どちらでもよい
12	あなたは、なるべく共通語をつかおうと、つとめていますか。			はい いいえ なにも考えていない
13	あなたは、学校の外（部落や近所など）で、共通語をつかって、笑われたことがありますか。			はい いいえ ときどき
14	あなたは、学校で、べんきょうの時間以外で、共通語をつかって、笑われたことがありますか。			はい いいえ ときどき
15	あなたは、家で、お父さんやお母さんから、なるべく共通語をつかうように、すすめられていますか。			いつもすすめられている ときどきすすめられている すすめられていない

昭和54年 男子児童生徒数 369名 女子児童生徒 371名 合計 740名  
 昭和38年 男子児童生徒数 726名 女子児童生徒 698名 合計 10424名

三 方言指数の算出

昭和38年とおなじように、次の方法で、方言指数 (dialect quotient) を算出した。

1 問1から問6、問9から問13 (10をのぞく) の計10問で、「はい (いつも)」を4点、「どちらともいえない」を2点とした。否定は0点とする。

2 次の公式で、方言指数(DQ)を算出する。

$$\frac{\text{個人方言得点 (IDS)} \div \text{完全方言得点 (CDS)}}{\times 100} = \text{方言指数 (DQ)}$$

完全方言得点は、すべての問いに「はい (いつも)」のばあい、10問で40点となる。

Table 2-1 方言しらべの対象

学 年		小 3	小 6	中 2
性		m f	m f	m f
S 54	都 市	57 62	57 55	63 56
	農 村	53 54	71 56	68 88
	備 考	m=369 f=371 合計 740		
S 38	都 市	125 100	114 118	124 112
	農 村	93 91	119 116	151 161
	備 考	m=726 f=698 合計 1,424		

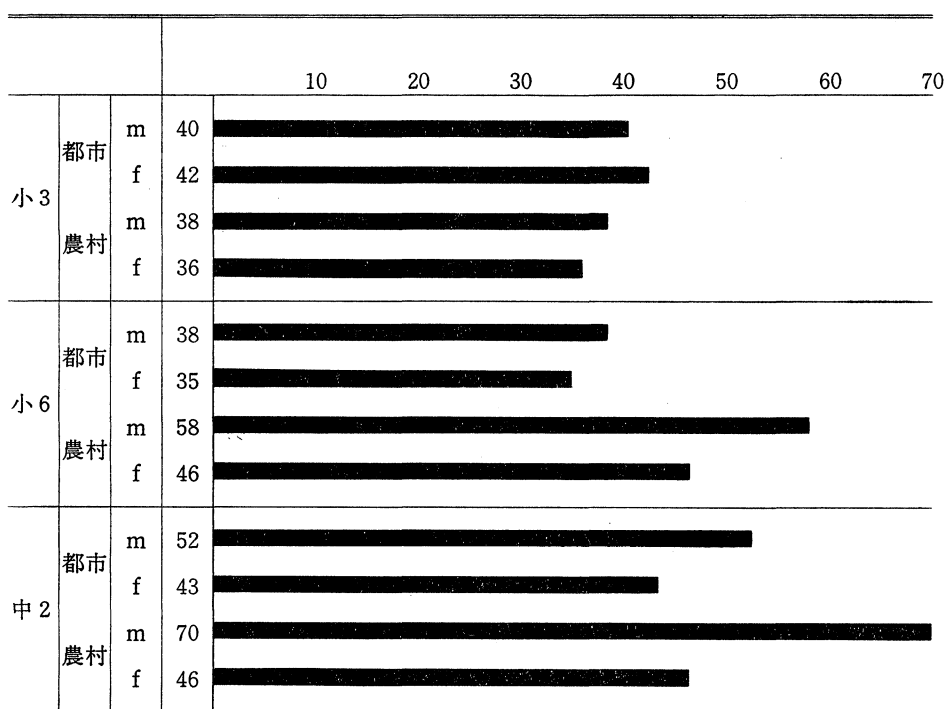


Figure 1-1 児童生徒の方言指数 (S. 38. 6)

四 研究方法の展望

方言と共通語の判別は、かならずしも容易でない。主観的・歴史的・社会的・言語学的などと、多くの判別基準があげられるであろう。鹿児島県出身の多くの警察官が、警視庁へ勤務して、「お

い、「こらっ」を用いたので、全国的に普及したという。

方言群の設定には、複雑な要因があげられる。語彙・語法・アクセント・イントネーションなどはもとよりとして、共通語との混用、相手や場による使いわけなどがそれである。方言コンプレックス (dialect complex) の有無や程度という要因も存在する。

この研究では、ある個人のもちいる音声言語が方言か共通語かの判別は、「方言しらべ」という形式の質問紙における反応によることにした。父母や教師の評定、面接による聴取、実験場面の設定などという方法も考えられる。

鹿児島方言の研究には、言語学・心理学・教育学・社会学・音声学などと、多くの方向があげられる。心理学的な立場から、研究分野ごとに方法を展望すると、次のようになる。

1 方言使用の実態 地域別に抽出した標本に、質問紙法や面接し、その結果を年令・性・職業・学歴・地域などの立場から分析する。

2 方言に対する態度 質問紙法・面接法・態度測定法・SD法 (semantic differential method) などで、本県人や他県人のもつ方言への態度を分析的に把握する。

3 言語発達に及ぼす影響 知能や家庭環境で統制した方言群と共通語群を設定して、テスト法・面接法・評定法・記録法などで影響をたしかめる、両群に自然観察や実験観察をするなどである。

4 共通語への適応 本県から他県へ転住したものについて、共通語への適応を、面接法・質問紙法などでたしかめる。

5 鹿児島方言への適応 他県から本県への転住者について、年令・性・学歴・職業・居住年数などの立場から、適応をたしかめる。作品法、面接法、質問紙法などによる。

### III 結 果

#### 一 方言使用の減少

「方言しらべ」における問1から問15までの結果を、年次別、地域別、学年別にまとめると、Table 3-1 から Table 3-15 のとおりである。問題によって、多少の差異があっても、全般的な傾向として、方言の使用がすくなくなっている。

問題ごとの結果を要約すると、次のとおりである。

1 授業時間での方言使用 各学年とも、方言の使用が減少した。農村の小6児童、都市の中2生徒では、「ときどき」の増加がめだっている。

2 休憩時間での方言使用 休みの時間でも、方言の使用が減っている。ただし、農村の小6児童には、異質的な傾向がしめされている。2名のうち、ひとりの教師の方言観の指導によるものである。

3 教師との対話 教師との対話で方言をつかうものは少数であるが、小3および都市の小6児童での減少がいちじるしい。農村の小6児童、都市の中2生徒では、異質性がみとめられる。

4 未知者との対話 知らない人と話すときに、方言をつかうものの減少がめだつ。「どちらでもよい」とするものが増加したともいえる。

5 校外での友人との対話 小3および都市の小6と中2の児童生徒で、方言の使用が減少した。農村の小6と中2の児童生徒たちは、方言をよく用いている。

6 家庭での方言の使用 各学年を通じて、方言の使用は減少した。都市と農村のいずれでも、おおむね有意の差をもって、方言の使用がすくなくなっている。

7 家庭での父の方言 いずれの学年や地域でも、家族との対話で方言をもちいる父は、全般的に減少した。とくに農村の父でいちじるしい。

8 家庭での母の方言 すべての地域や学年で、家族との対話時における母の方言使用は、いちじるしく減っている。父のばあいよりも、減少傾向がめだつ。

9 父母や兄姉との対話 都市と農村の区別なく、どの学年でも、方言をもちいる児童生徒がすくなくなっている。

10 弟妹との対話 弟や妹と話せばあいにも、方言を使用するものがすくなくなった。ただし、昭和38年の数字は、問9のものによる。弟妹のいないものは、「其他」として、別途の処理をした。

11 話しやすさの比較 話しやすさということで、共通語と方言をくらべると、小6の児童を例外として、方言を話しやすいとするものは、おおむね減少した。小3の児童では、共通語を話しやすいとするものが、いちじるしく増えている。

12 共通語を使用する努力 日常の話しことばについて、方言を意識するものが、いちじるしく減っている。方言指数の低下、家庭や学校における共通語指導の消極化などによる変化とおもわれる。

13 校外での共通語使用への嘲笑 共通語をもちいて他の人から笑われたものは、農村でもいちじるしく減っている。

14 校内での共通語使用への嘲笑 学校生活の授業時間外で、共通語を話して笑われたものも減っている。農村の小3や中2の児童生徒でも、減少がめだっている。

15 共通語使用のしつけ 家庭のしつけで、共通語をつかうようにすすめられているものは、いちじるしく減少した。方言指数の低下によるものと思われる。

これらを通じて総括的にいえることは、方言使用の全般的な減少である。その理由としては、幼児教育の発展、テレビの普及、交通の進歩、社会教育の充実・学校教育の拡充などがあげられる。

